宗旨建立会

『御講聞書』に（新編一八四四ページ）

「今末法に入りて、上行所伝の本法の南無妙法蓮華経を弘め奉る。日蓮世間に出世すと云へども、三十二歳までは此の題目を唱へ出ださゞるは仏法不現前なり。此の妙法蓮華経を弘めて終には本法の内証に引き入るるなり」

本日は、宗旨建立会を奉修いたしました所、ご参詣をいただき、仏祖三宝様に対し奉り御報恩謝徳申し上げることができまして、誠に有り難く存じます。御報恩のために大聖人様が宗旨を御建立あそばされました意義につきまして少々お話いたします。

大聖人様は、一切衆生の不幸の根源は、時代に不相応な低劣な邪法を信仰する結果であり、末法万年の時代を救うべき道は唯一つ、法華経寿量品の奥底に秘し沈められた妙法蓮華経の大法を建立し、弘通する以外にない、と確信されたのであります。

建長五年（一二五三年）の今日・四月二十八日、御年三十二歳の年、修学の旅から戻られた大聖人様は、清澄山・嵩ヶ森の頂に立たれ、遠く太平洋の彼方。水平線上に今まさに昇り来る朝日に向かって、古今東西初めて「南無妙法蓮華経」の題目を一人、力強く唱え出され、立宗を宣言遊ばされたのであります。

そして、山を下りられ、清澄寺内・師匠・道善房の持仏堂南面の説法の座に着かれると、集まった聴衆を前に、ご自身を「法華経の行者・日蓮」と号され、初の説法即ち初転法輪をなさったのであります。

この初転法輪で、大聖人様は経文上の数々の証拠を引かれ。当時流行していた念仏宗、禅宗等が釈尊の真意に背く邪宗であることを明らかにされたのであります。

大聖人様は、貞応元年（一二二二年）

安房の国小湊（コミナト）にお生まれになり、天福（テンプク）元年、十二才の御時、古刹・清澄寺に登り、道善房を師として仏門に入られ、四年後の嘉禎（カテイ）三年、十六才の御時に正式に出家剃髪（テイハツ）されて、「善日麿」との名を、「是生房蓮長」と改められました。

当時の仏教界は、末法濁悪の時代に入り、文字どおり白法隠没の様相を示し、同じ釈尊の教えを拠り処としながらも、念仏、禅、真言、天台などの宗派が乱立して、真実の仏教がいったい何処にあるのか、見極めがつかない状態だったのであります。

このような乱立した仏教界の中にあって、大聖人様即ち是生房蓮長師は、仏の真の教えはただ一つのはずであると考えられ。その真実の仏法を探究し、一切の民衆を迷いと苦悩から救済したい、との大願を抱（イダ）いておられたのであります。そして、この御目的を遂（ヨク）げんがために大聖人様は、出家なされ翌々年（ヨクヨクネン）、ひとり鎌倉へ、そして比叡山へと修学の旅に出られ、広く各宗の法義を研鑽され、久遠の御本仏としての生智の妙悟は元よりでありますか、ついに仏法の極理に通達されたのであります。

『御講聞書』（新編　一八四四ページ）

この説法は聴衆に大きな衝撃を与え、たちまち大聖人様は、念仏の盲信者である地頭の東条景信から追われる身となったのであります。

『開目抄』に（新編五三八ページ）

「これを二百も申し出だすならば父母・兄弟・師匠に国主の王難必ず来たるべし。（乃至）今度、強盛の菩提心ををこして退転じと願じぬ」と仰せの如く、

大聖人様にとって、この襲い来る大難も、かねてよりの御覚悟であり、この民衆救済・

広宣流布への広大な御慈悲と決意は揺らぐことは、微塵も無かったのであります。それどころか、政治の中心地・鎌倉へ出て、さらなる折伏教化に力を入れられたのであります。

『上野殿御返事』に（新編一三六一）

「日蓮生まれし時よりいまに一日片時もこころやすき事はなし。此の法華経の題目を弘めんと思ふばかりなり」とあります。

この四月二十八日の立宗会にあたり私たちは、大聖人様が決死の覚悟で唱え出だされた妙法を大聖人様と同じように弘通する事を誓い合うことが、大聖人様に対し奉り最高の御報恩になるのであります。

『四菩薩造立抄』に（新編一三七〇ページ）

「総じて日蓮が弟子と云って法華経を修行せん人々は日蓮が如くにし候へ。さだにも候はゞ、釈迦・多宝・十方の分身、十羅刹も御守り候べし」と仰せであり、

『寂日房御書』には（新編一三九三ページ）

「かゝる者の弟子檀那とならん人々は宿縁ふかしと思ひて、日蓮と同じく法華経を弘むべきなり」と仰せです。

皆さま方には更なる折伏実践の御精進を願う次第であります。ところで、初転法輪の会座においては、いまだかつて聞いたことのない説法に対し、謗法の執着が強い地頭の東条景信は大聖人様の説かれるところを理解せず、瞋と憎しみを懐いて怨嫉誹謗の徒となり、後には、ついに無間大城の苦を受けることとなったのであります。

しかし下種の妙法の功徳は、地によって倒れた者がまた地によって立つように、これらの誹謗した者も一度はその罪によって悪道に堕ちますが、それが縁となって逆に成仏への道が開かれるのであります。

『法華初心成仏抄』に（新編　一三一五ページ）

「地獄には堕つるとも、仏になる法華経を耳にふれぬれば、是を種として必ず仏になるなり。されば（中略）此の心を以て強ひて法華経を説くべし（中略）譬へば人の地に依りて倒れたる者の、返って地をおさへて起つが如し。地獄には堕つれども、疾く浮かんで仏になるなり」と仰せられ、

誹謗した者もそれが種となって逆に成仏への道が開かれるのである。故に、強ひて法華経を説き聞かせるべきであります。

私達が折伏する時の重要な心得として、この信ずると謗ずるとの如何にかかわらず、強いて妙法の話を耳にふれさすことが大事なことであります。それが縁となって下種の妙法の功徳となり、成仏への道が開かれるのであります。

大聖人様の南無妙法蓮華経の一念、大慈悲の一念が国土・衆生・五蘊の三世間にあまねく浸透し、知ると否（イヤ）とにかかわらず、また信ずる者と謗ずる者との如何にかかわらず、末法の一切衆生と一念三千の法界に妙法を下種されたところに立宗宣言の究極の意義があるのであります。

毎年執行される宗旨建立法要は、このような宗祖日蓮大聖人様の広大無辺の大慈悲に対し奉り御報恩申し上げる儀式でありまして、この儀式に際し私たちは不退転の弘通誓願をなされた大聖人様のお心を拝し奉り、いよいよ信心を強盛に死身弘法の決意を新たにしようではありませんか。

皆さん、本日は誠に御苦労様でした。